

明治あやかし恋綺譚

～式神に愛された男装令嬢～

夕張さばみそ Sabamiso Yubari



アルファポリス文庫

目次

明治あやかし恋綺譚 く式神に愛された男装令嬢く	5
番外編一 成長期	149
番外編二 御霊府君の思い出	157
番外編三 道蓮と天誅殺	167

明治あやかし恋綺譚

く式神に愛された男装令嬢く

序

「灯子、僕の両目が治ったら、僕と夫婦になってほしい」
凜とした声で告げられた言葉に私は思わず彼を見つめた。

視界の先に佇むのは、艶やかな黒髪を持つ美しい少年。彼はまるで、まぶた越しに私を見つめるように立っている。

「道蓮様……」
名を呼ぶと、彼は苦笑しながら続けた。

「……気が早いのは、わかっている。僕は土御門の娘であるお前の夫としては相応しくない」

「そんなこと……」

言いかけた私に道蓮様はそつと首を振り、穏やかな笑みを浮かべた。

「でも、生まれやこの世界に対して恨みしか持っていないなかった僕を、認めてくれたのはお前だけだった。光の見えなかった僕の人生に、お前だけが希望の灯をともして

くれたんだ……。僕の心は、生涯、お前だけのものだ。お前以外の娘なんて、いない」

生まれて初めて受けた熱烈な愛の告白。

耳の奥で自分の鼓動が跳ね回るのを感じる。

突然の告白に戸惑っている私の空気を察したのか、道蓮様は口元をゆるめ、いたずらっぽく笑った。

「お前……。さては僕の言葉を疑っているな?」

まるで心を読まれたようで驚いてしまう。道蓮様は小さな胸を張って、得意げに自分の胸を親指でトンと指した。

「灯子の好きな所なら、僕は幾らでも話せるぞ! たとえば……お前は、僕の傍でしょっちゅう転ぶ。騒がしくて危なっかしいし、夜中に一人で厠に行けなくて、毎晩手を繋いでついてきて欲しいとねだる。山を元気に飛び回るし、料理は少ししょっぱいし……」

「道蓮様……それ、褒めていませんよね……?」

短所の羅列にしか聞こえなくて思わず抗議すると、彼は明るい声で片手をひらひらと振った。

「いや、褒めてる! 僕はお前の料理、好きなんだ! それにお前が得意ではないと

いうなら、僕が上手くなる! それだけじゃない——」

道蓮様の手が宙を彷徨った。私の手を探すような仕草を見てそっと自分の手を重ねる。

「僕は、誰よりも強い陰陽師になって——お前を、全ての『こわいもの』から守る。

どんな夜の闇も恐れずにいられるように、ずっと手を握って傍に居る。その為にも、

僕は、この目を治して、お前の伴侶に相応しい男になって必ず戻ってくる。それまで、これを……」

道蓮様は自身の髪を一本抜きとると、私の左手に触れて小指を探し当て、指の根元に器用に結んだ。

指に結ばれた黒髪を見つめていると、道蓮様がそっと囁いた。

それは道蓮様が出掛ける度にしてくださる、おまじないだった。

「旅先から手紙を出す。毎日書いて送るから」

それから——手紙は途絶えてしまった。

一、

幼き日の淡い夢が不意に黒い夜空と桜の花卉に塗りつぶされる。

そして現れたのは、黒い衣を身に纏い、顔を隠した鬼。

(やめて……)

鬼によって燃え上がる土御門の屋敷。呪詛じゆそによって血が溢れ、瀕死の私。

(やめて！)

何かが、頬を濡らした。拭っても拭っても止まらない。

『灯子！ 目を覚ませ灯子！』

耳をつんざく低音に、はっとして目を開ける。

寝台の傍には雪色の髪と衣の男の人が立っていた。

『どうした？ うなされておったぞ』

まるで霧が人型をとったように幻想的で、どこか儂い美しさを持つ青年。

一瞬、まだ夢の続きを見ているのかと思つて、私はぱちぱちと瞬きをしていた。

けれど、そんな私の額に、容赦なく手刀がどすと振り下ろされる。

「あいたつ」

『こら！ 儂わしがいくら絶世の美男子とはいえ、いい加減に見慣れぬか！』

彼の名は御霊ごりやふん府君。

土御門の血統を守護する式神で、今は私に憑ついて守ってくれている。

……とはいえ、どう見ても彼の方が主で、私の方が弟子か式神のような立場なのだから。

『寝起きの悪さは幼子の頃から変わらぬのう！ 遅刻するぞ！ さつさと支度せい！』

怖い夢を見たのなら、後で儂が聞いてやる！』

「は、はいっ！ 申し訳ありません！」

——そうだった！ 今日が入学式！

私は跳ね起きて、慌てて身支度を始めた。

昨日のうちに準備しておいたサラシを胸に巻き、姿見に映る自分を確認する。

あの夜につけられた呪詛の紋様は、背中にしっかりと刻みこまれている。それを隠す意味でもサラシは必要だった。

「府君！ どうでしょうか？ おかしな所はありませんでしょうか？」

御霊府君の前でくると回転してみる。御霊府君は不機嫌そうに言う。

『……やはり心配じゃ……。男の前で堂々と着換える危機感の無さで、飢えた野獣の

如き雄の巢窟で暮らしていけるのかのう……」
 私が今日から通う陰陽學寮は陰陽師を育成するための学校だ。男子のみが通うことを許されており、そこでは身分を問わずに陰陽師を目指す者達が全国から集ういう。

(その中で、頂点を目指す事で、陰陽頭への道が開ける……)

私は眠り続ける弟の顔を思い浮かべ、家宝の日月剣を握り締めた。

(晴人の呪詛を解く為にも、私自身が未来を掴まねば！)

もう、今の私には、将来を誓い合った道蓮様との絆も無いのだから。

鏡の前で自分の両頬を叩き、気合いを入れた。

今日は進路に関わる組分けの為の試験もある。上級の組に編成されれば、それだけ陰陽頭への道が近くなる。

陰陽頭になれば、禁書の閲覧が許される。それを使えば私と晴人の呪詛も解けるかもしれない。

(晴人……！ 姉様は貴方と御家の為に頑張るからね……！)

赤い紐で固く封印された日月剣を掴み、鞆を抱えて部屋から出る。

その時に、私は枕元に置かれた父母の写真に声をかけた。

「……行つて参ります、お父様、お母様……」

御霊府君は実体化を解いて、宙に浮きながらついてきてくれる。

皇都を歩くのは初めてのことで、道行く人の洋装や建築様式の違いに驚いてしまう。

そんな街並みの中で、同じ制服を身に着けた男性がチラホラと見えていた。

(学友であり、ライバルとなる人たち……)

性別を隠したまま彼等と競わねばならないと思うと、途端に不安になる。

そんな風になっていると、学園を目指す生徒の列から少し外れた位置で、しゃがみこんでいる人が目に入った。

思わず息をのむ。

長い髪をリボンでゆつたりと結び、桜色の唇は薄く艶やか。儂さと仄かな色香を漂

わせる女性はまだにも美しく……あれ？ 喉仏？

(それに陰陽學寮の制服を着ているし……)

混乱する程に美しいその人物は、目に涙を浮かべながら何かを集めているようだった。よく見ると、彼の周囲には鞆の中身らしきものが散らばっている。

困っている様子が放っておけず、思わず声をかける。

「君、落とし物？ 大丈夫かい？」

男性っぽい口調を意識して話しかける。

それから床に散らばる鉄の部品を差し出した。

すると相手は私を見るなり、大きな瞳を更に見開いた。あまりに驚くものだから、男装がバレたのかと一瞬ヒヤリとしたけれど、慌てた様子の彼にそうではないと思いき直す。

「あ、は、はい……！ す、すみませんすみません！ あの、ぼく、ドジだから、その、ぶつかって、転んじゃって……ど、どうしようって……」

動揺しているのか、渡した部品をまた落としてしまい、更にオロオロと慌てていた。後方から御霊府君の苛立った声が聞こえる。

『カーツ！ 何じゃ！ この優男は！ 灯子！ こんな軟弱者に構っている場合ではないぞ！』

実体化してないので私以外の人には府君の声が聞こえないのが救いである。

まだ時間がありますし。そもそも困っている人を放っておくのは……と心の中で府君を宥めながら全て拾い集める。

荷物をまとめ終えると、美青年は照れ笑いを浮かべて、深々と頭を下げた。

「あ、ありがとう！ ぼ、ぼくなんかの為に、立ち止まってくれて……きみ、凄く優しいんだね……」

立ち上がってみると、彼は女性的な外見とは裏腹に、とても背が高かった。実体化した御霊府君と同じくらいあるかもしれない。

それはともかく、役に立てたなら何よりだと返す。

「助けになれたなら良かった。それじゃあ、君も遅刻しないように気をつけてね」
もしかしたら同じ級になるかもしれない。非礼にならないように紳士的に対応し、その場を立ち去ろうとした。でも鬼壺さんはドジっ子なのか、転んでいた。

その瞬間、唐突に御霊府君が叫んだ。

『灯子！ 避けよ！』

「え？」

体がふわりと宙を舞う。

御霊府君が私の体に憑依して動かしている感覚だとわかった。

が、その府君が操作する私の体は、近くの塀の上に着地する。ついでに倒れていた鬼壺さんも蹴とばしている。

（え？ え？）

先ほどまで走っていた道には、黒い影のような矢が何本も突き刺さっていた。それを見てぞっとする。

『灯子！ 呆けるでない！ 鬼じゃ！』

御霊府君が私の体を使って鞘に納まったままの日月剣を構える。

納刀状態の得物を軽々と振り、追撃の矢を弾きながら塀の上を素早く後退した。

御霊府君が戦闘状態に入ると、私は自身の体の中から彼に援護の術をかけつつ、周囲を窺う。

漆黒の矢は道行く人を撃ち抜いていた。通りは怪我を負った人たちの苦悶の声に満ちている。

(皇都には鬼が増えていると聞いたけど、こんな昼間から人間を襲うなんて)

射抜かれた人々は傷口から侵食するように皮膚が黒ずんでいく。

呪詛だと推測された。それもかなり強力な。

姿が見えない敵の攻撃をせめて此方に引きつけようとする。戦えずにいる鬼壱さんの為にも困らなうと思った。

しかし、それは御霊府君によって阻止された。

「府君！」

御霊府君によって意識を体の奥に押し込まれているので、中から訴える事しか出来ない！

『たわけが！ 目覚めぬ弟を救うという大義を忘れたのか!?!』

「も、申し訳ありません！ でも……!!」

『あつ！ こら！ 待たぬか灯子!』

制止する声を振り切り、御霊府君から身体の主導権を取り戻す。

そして走りながら鞘に納まったままの日月剣を振りかぶる。

呪詛の矢が刀にぶつかって音をたてて弾ける中、何本かは手足をかすった。

痛みはあったものの、私の体は既に強力な呪詛に汚染されている。この程度の鬼の呪いはあつという間に掻き消されていった。

戦いは御霊府君に憑依された時に体で少しづつ学んだ。

(そんな付け焼刃が通じるかわからないけど……でも、やるしか……!!)

あやかしの呪詛で苦しむ人々と、喪った家族の姿が重なる。

そう覚悟を決め、大きな角を頭部に生やした赤い鬼と相對した私の眼前に眩い光が走る。

(えっ……?)

次の瞬間、生ぬるいものが周囲に降り注ぐ。

続けて、細切れになった『何か』が、ぐしゃり、と湿った音をたてて水たまりに転がる。

私の足元に血の池が広がり、その中央に、鬼の屍骸が、ぷかりと浮いていた。

全ては一瞬の出来事だった。

「あ……」

思わず、声が漏れる。

私の目の前には、黒髪をなびかせた男が、漆黒の刀身を手に、背を向けて立っていたのだ。

切っ先から滴る雫が血だまりに波紋を生み出す様が、恐ろしい程に美しく見えた。ゆっくりと振り返る黒髪の男に、私は息をのむ。

彼は、目が治っているけれど、幼い日に別れた——道蓮様だった。

二、

「どう……」

名前を呼びかけて口を押さえる。

私が男装して陰陽學寮に入學している事も道蓮様には知らせていない。

それどころか、土御門家が崩壊した『あの夜』を超えて、生きのびている事も……。

(皇都に居れば、いつかすれ違う事もあるかもしれないと思っていたけれど……)

どうして今、道蓮様が此処に、しかも自分と同じ制服を着て立っているのか？

驚いたのは偶然の再会だけではない。その変貌ぶりだ。

幼い頃の面影は確かに残っている。

けれど瞳は完全に輝きを失い、墨で塗り潰されたような闇色に染まっていた。

虚空を見つめるようなそれは、まるで魂なき死者が活動しているようで、表情も無に等しい。

その道蓮様の虚ろな瞳が私を捉えた。

心臓が跳ねる。

（手紙が途絶える前、目を治す予定だとは聞いていたけど……）
道蓮様は私に気が付くだろうか。

息をのむ私に、道蓮様は一瞬、片眉を上げた。

「……」

「……」

ただ無言で見つめ合っていると……不意に道蓮様はくりりと背を向けた。

（ど、どういう反応……？）

背を向けた彼が、子供の頃とは違う、低い声で告げる。

「……この程度の鬼も殺せぬとはな」

ぞつとするような冷たい声音。

突然のことに動けずにいる私の目の前で、道蓮様は握り締めた刀で、既に死んでい
る鬼を刺し貫いた。

逃げた鬼はいないかと、獲物を探す獣のように視線を巡らせている。

呪詛に苦しむ人々よりも、鬼を殺すことを優先しているようだった。

その姿に、今まで沈黙していた御霊府君が呟く。

「……あやつ、刀に飲まれておるの」

「どういう事ですか？」

「……」

それに御霊府君は答えなかった。

すると、民間人の救助をしていた金髪の小柄な少年が道蓮様に駆け寄って彼の腰を
叩きだす。

「おう！ どーれん！ 助かったぞ！」

「……マキリか」

マキリと呼ばれた少年が道蓮様の上着を引っ張って私に紹介する。

「おれはマキリ。こいつは、どーれん。ちょっとネクラだけど、ワルいやツじやない
からな！ 仲良くしてやってくれ！ どーれん、トモダチいねーからな！」

「根暗……」

（まるで別人……。でも、目の前の方は間違いなく道蓮様）

その証拠に他人の話の話を聞いている時、ごく僅かに小首を傾げる癖は変わっていない。
幼い頃の記憶の中の彼と同じ草が私を困惑させた。

戸惑っていると、落とし物を拾っていた例の青年がオドオドしながら口を開く。

「助けてくれてありがとう……。あの、ぼく、天狗寺鬼壺（てんぐじおにひち）っていいます」

「僕は土御……じゃなくて、安倍燈次郎（あべとうじろう）！」

私は慌てて偽名を名乗る。しかし……。

「……」
道蓮様は鬼壺さんに自己紹介されても視線すら向けず、まるで居ないもののように無視していた。鬼壺さんは表情を曇らせながら、不安げに続ける。

「あ、あの、『どーれん』って、君、蘆屋道蓮？ あの土御門のお姫様と婚約してたっていう……？」

心臓が跳ね上がった。

刹那、黒刃の切っ先が鬼壺さんの喉にのびる。

私の体に憑依した御霊府君が、私の腕を操って日月剣を振るう。

鞘が道蓮様の黒刃を弾き、悲鳴のような音と火花が飛んだ。

マキリさんと鬼壺さんが目を丸くしていたけれど、道蓮様だけは何かに気づいたように片眉を上げた。

「……貴様、憑き物憑きか。珍しいな」

そして少しだけ口角を上げた。

「……憑き物憑きなら、鬼を更に殺せるだろうな」

嬉しそう(?)な道蓮様が刀を構える。

「残党がないか、探してくるか。鬼は皆殺しにしてやる」

走り出そうとする道蓮様の服をマキリさんが猫のように掴んで叫んだ。

「どーれん！ 早く行かねーとチコクするぞ！ どーれん！ チコク！」
鬼壺さんも道蓮様の服を掴む。

「そ、そうだよ道蓮君！ 退学になっちゃうよ！」
そうしている間に学校から鬼の処理班が到着し、事態は終着した。

三、

急いだ甲斐もなく、四人揃って遅刻という大惨事。

通常なら退学モノだし、鬼を一体倒した時点で報告に来いと先生に叱られて渡された紙……。そこには『ヲ組』と書かれているのに、私は頭を抱えていた。

(ヲ組……、最底辺の……組……)

目眩めまいがした。

既に同級生は組配属が終わっているらしく、教室には私と道蓮様、マキリさん、鬼壺さんしか居ない。

そして全員の手の中の紙に同じ単語が記されていた。

担任である将雪教官——『将雪おじ様』は私の知人である。ただ、学園では一生徒と教官として接すると入学前に決めていた。

教官は、ヲ組の通知を手にする私たちを見て、眉間の皺を深く刻んでいた。

落ち込んだ空気の中、マキリさんが明るく話しかけてくる。

「おう！ オマエらも同じ組か！ ヨロシクな！ で、ヲ組って何だ？ いちばん

サイキョーの班か？」

私と鬼壺さんはマキリさんの言葉に返事ができずにいた。

一人、冷静だったのは道蓮様だけだった。

「……俺は、鬼を殺せればそれでいい」

その沈んだ様子に教官が微かに眉をひそめる。

「お前達のような無茶をする問題児を普通の生徒と混ぜられるか」

先生の言葉にマキリさんと鬼壺さんがワアワアと騒ぎ出した。

「おれ、問題児じゃねーぞ！ 良い子だぞ！」

「教官！ 安倍君は、ぼくを守ってくれた人だから、危険じゃないですよ！」

二人の様子に先生は軽く咳払いをすると、理由を説明し始める。

「鬼が増え続けている今の世では、優秀な陰陽師の存在が不可欠だ。だがそれだけでは足りない。今、お前たちに必要なのは、規律の意味を理解することだ。今回は結果こそ良かったが、まずは学園に報告に来るべきだった。学生の身で鬼に立ち向かおうとするのではなく、な」

先生の言葉にマキリさんも鬼壺さんも、シユンとしてしまった。

そして二人が口を開いた。

「……わかった。ごめんな、とーちゃん」

「教官、申し訳ありません……とーちゃん？」
驚く鬼壺さん。

そこで教官がまた咳払いをした。

「……マキリ、此処では『父』ではなく『教官』と呼ぶようにと何度も……」
「とーちゃんはとーちゃんだろ？」

そうこうしている間に予鈴が鳴った。

教官が時計を確認すると、私達全員に向かって告げる。

「もうこんな時間か……。続きは今度だ。食堂に行きなさい。それから寮へ向かうように。次からは気をつけなさい」

皆で食堂に行くという声掛けを無視していた道蓮様。

しかしマキリさんがキラキラした目でじっと見上げてくる小動物のような『庄』に抗えなかったのか、結局、洪々ながらも私たちと一緒に食堂へ向かうことになったのだった。



陰陽學寮の食堂は学校と寮の間に併設されているとのことだった。

学園の建物はどれも洋風建築を取り入れたもので、私にとっては馴染みのない雰囲気だ。

食堂の入り口傍で御霊府君が、私に手招きして話しかけてくる。

『灯子灯子、見本があるぞ。こっちの味噌汁と焼き魚の定食にせい。南蛮の飯なぞ、パサパサして脂臭くて食べたものではないからのう』

御霊府君は食べるのが大好きだ。実体化できない状況だと、食事中の私に憑依してくることもある。

今日も当然のようにそうするつもりらしく、熱心に献立を見ていた。

視線の先に『焼き魚定食』『マカロニグラタン定食』と書かれた札と、それぞれの見本料理が並んでいた。

まかろにぐらたん……？ まかろって何……？ ぐらたんも、何なのだろう？

味の想像がつかない料理と、食べ慣れた料理を前に私は首をひねる。

マキリさんや鬼壺さんには御霊府君の姿は見えていないはず……。なのに、なんとなくその気配を感じ取っているのか、彼の隣に立ってメニューを見て話し合っていた。「おぉー！ どっちもウマソウだな！ キーチ！ これは悩むな〜！ キーチは、どっちにするんだ？ 魚か？ こっちの白い泥か？」

「え？ キーチって、ぼくの事？ あ、あの、ぼくの名前、キイチって読むんじゃないやなくて、オニイチって読むんだけど……っていうか、グラタンは泥じゃないよ！ だめだよ、食べ物そんな風に言っちゃ！」

食堂は西洋の方式を採用していると聞いたけど……

どうやって食事を受け取るのかわからなかった。

なので、道蓮様のやり方を見て同じようにしてみようと凝視する。

道蓮様はこの食事形式に慣れているのか、そつなく注文して料理を受け取る。そして振り返らずにスタスタ歩いて行ってしまった。

その後、厨房に居た女性が仕切り越しに私に話しかけてくる。

「おやまあ！ とんでもない男前の後に、今度は凄いい美少年が来たねえ！」

厨房の女性陣が道蓮様を見て黄色い声を上げていた。

けれど、次に私を見て

「あら！ 可愛い！」

「女の子みたいに可愛い子がきたわあ！」

と騒がれ、笑顔が硬くなる。出来る限り低い声を出そうと、気合を入れた。

「ぼつ、僕は、び、びい定食？ なるものをッ、いつ、頂けッ、ますッか？」

あああああああ！ 緊張して思いっきり囁んでしまった！

けど、厨房の女性達は歓声を上げる。

「こりゃあ、また、真っ赤になって可愛い子だねえ！」

「女慣れしてない美少年とか最高じゃないか！」

「お姉さん達を見て赤くなるなんて、初心な子だねえ！」

「いっぱい食べて、早く良い男におなり！」

何だか違う方向に勘違いされたけれど、バレなかった！

料理の乗ったお盆を手に、空いている席を探していると、鬼壺さんが立ち上がった

手を振ってくれる。

「あ、あの、ここ、良かったら……」

席は埋まっていたけど、鬼壺さんがマキリさんと自身の席の隣に制服を置いて、私と道蓮様の為にとってくれていたようだ。

「ありがとう、助かったよ。待っていてくれたのも、ごめん。ありがとう！」

とりあえず一番近かったマキリさんの隣に座って、そう伝える。
すると鬼壺さんが少し空気を沈ませた。

「あれ……？ 何かまずかったのかな？」

そうしていると、一人になれる席を探していたらしい道蓮様が鬼壺さんの隣しか空いていない事と、その空席の目の前に居る私を見て眉を寄せた。

「どーれん！ 早く座れー！」

促して道蓮様を無理矢理座らせたマキリさんが、明るい口調で続けた。

「そんなじゃ、最強のヲ組の作戦会議でもするか！ 同じヲ組同士！ がんばろーな！」

その言葉に食堂内の談笑が止み、視線が突き刺さる。

居心地の悪い空気の中、ひそひそと笑いまじりの侮蔑おそが聞こえてきた。

「……ヲ組って、最下位の？」

「うわあ……。開始時に最下位とか、将来終わったな……」

「あいつ蘆屋道蓮じゃないか？ 天狗寺の次男も居るし」

「家柄だけ良くても、実力はそんなにーってヤツ？」

嘲笑う声に、鬼壺さんは震えて涙目になっていた。けど、マキリさんは気にせずお椀を両手で持ってお味噌汁を飲んでいたし、道蓮様は周囲の雑音に構わず黙々とグラタンを口に運んでいた。

御霊府君は鼻息も荒く文句を連ねている。

『フン！ 下僕どもと儂の灯子を一緒にするな！』

黙り込んだ私たちにマキリさんが励ますように言う。

「大丈夫だぞ！ 今はドベだとしても、昨日の自分より成長できるよーにガンバればいい！」

胸を張るマキリさんに鬼壺さんは暗い表情で首を振った。

「キーチは暗えーな！ そんなんだからドベのヲ組なんだ！」

「君も同じヲ組じゃないか！」

「とりあえず、同じ班として、改めて自己紹介でもしようよ」

じゃれあう二人を見て、このまま空気を変えようと提案する。

「僕は安倍燈次郎。陰陽師になりたくて、地方から出てきたんだ。よろしくね」

まずは自分からと、教官たちが用意してくれた名前を名乗ると、マキリさんと鬼壺さんも改めて自己紹介してくれた。

「賀茂マキリだ！ 十三歳な！ とーちゃんみてーな陰陽術も使える漢になりたくて此処に来たんだ！」

「ぼ、ぼくは天狗寺鬼壺……。じゅ、十六歳……。此処こゝに来たのは、家族に言われたから……。足だけは引つ張らないように努力するね……」

道蓮様は自己紹介の順番が来ても黙っていたけれど、隣のマキリさんに肘でつつかれて、仕方なさげに口を開いた。

「……蘆屋道蓮。十八」

「どーれん、それだけか？ 将来のユメとかキボーとかシユミとか言わねーと。ボツチのままでぞ？」

「知るか。お前も話しかけるな。鬱陶しい」

マキリさんは道蓮様に拒絶されても平然とご飯を食べていた。

そんなマキリさんとは裏腹に、鬼壺さんは食が進んでいない。顔色も悪そうに見えた。

「……苦手な食べ物でもあるの？」

気になって声をかける。鬼壺さんは苦笑してお腹を撫でた。

「……ほく、少しでも緊張すると、すぐに食欲がなくなっちゃって……ダメな奴だよね……」

彼はきつと、飛び抜けて繊細なのだろう。

「……鬼壺君、ちょっと待っててくれる？」

私は鬼壺さんに声をかけると厨房に急ぎ、調理の女性達に声をかけた。

事情を汲んでくれた彼女達に丁寧に丁重にお礼を伝えて、受け取ったものを手に鬼壺さん

の元に戻る。

「鬼壺君、これ良かったら」

そう言ってお粥かゆの入ったお茶碗を差し出す。

「え……、ど、どうして……？」

鬼壺さんが驚いた様子で私を見るので、説明を加えた。

「しんどい時は、温かいものをゆっくり食べると元気になるらしいよ。君は十分、頑張っていると思う。だから、もっと自分に優しくしてあげてね」

「……！」

鬼壺さんは驚いたように私を見つめる。

続けて持ってきた匙を手渡すと、お粥とお粥を口に運び始めた。お粥が相当に美味しかったのだろうか。鬼壺さんはいつの間にか泣きそうな顔になっていた。

ふと顔を上げると、それまで無関心そうにしていた道蓮様が見つめていた。

「……」

あまりにも凝視されるので、上擦った声で問いかける。

「あ、あの、道蓮さん、何か？」

「……別に」

道蓮様は視線を落とすと、感情がわからない声でつぶやいた。

(しかし、班分けがこの面々で確定してしまうなんて……)

辛いな事に道蓮様に正体は気づかれていない。

けど、入学時の組分けは、基本的に代わる事は無いらしい。

しかも、一人が崩れると全体の成績が下がってしまうという特殊な方式だった。

(仲間内で相性が悪ければ一人が優れていても結果に繋がらないと……)

他の卓の生徒は会話が盛んに見える。

しかし、この卓ではマキリさんは自由奔放に食事に夢中。

鬼壺さんはお粥が美味しいと嬉しそう。でも私以外と会話する気はなさそうだ。

道蓮様に至っては、誰とも関わる気が無いようで『話しかけるな』という無言の圧さを感じられた。

(この班で共闘……。私は、ちゃんと立ち回れるだろうか……)

もともと山奥の家で家族や道蓮様としか密な交流をした事が無い引きこもりの身には、どうやって初対面の方と打ち解けて仲良くなるのか、手順がわからない。

そう思っている私に、府君が満足げな声音で告げる。

『ふむ！ この、まかるにぐらたんなるもの、やたら熱いが、真に美味じゃな！七百年前は、こんなハイカラなものは無かったからのう！』

なんだか喉を美味しいものが通り抜けるなあと思っていたら、私が考え事をしてい

る間に、もう食べられていたのですね……。

嬉しそうに頬張る御霊府君に、マキリさんが興味を示したらしい。

「そんなにウメーのか！ よし！ マキリにもくれー！」

『やらぬ！ うぬは僕の焼き魚を喰ったではないか！』

「あれはウマかった！ それはそれとして、くれー！」

マキリさんが素早く手を伸ばすのを御霊府君が、手刀で打ち落とす。

まるで猫同士が食べ物を奪い合っているような光景の中、道蓮様が食事を終え、静かに立ち上がった。

お盆を持って歩きだす道蓮様に、マキリさんが声をかける。

「どーれん！ 相変わらず食うの早えーな！ ゆっくり食わねーと体に悪いって、

とーちゃんが言ってたぞー！」

「……食事など、敵を殺す為に必要な栄養さえ摂れば何を食っても同じだ。それに、貴様らと馴れ合っている暇などない」

そう言い放つと、道蓮様は靴を鳴らして立ち去る。

結局、食事を終えても、班の空気は好転しなかった。



食事を終えた私達は、教官の指示通り、学生寮へと向かっていた。食堂と寮を繋ぐ渡り廊下を鬼壺さんと並んで歩く。

ちなみにマキリさんは私の背で、グーグー寝ていた。

マキリさんは食事が終わった途端に爆睡してしまい、呼びかけても揺すっても起きなくなってしまうのだ。仕方なく背負うしかなかったのだけど……。

「あ、あの、おんぶさせてごめん」

鬼壺さんが申し訳なさそうに告げた。

小柄なのに、筋肉のせいか意外と重いマキリさん。そんなマキリさんを鬼壺さんが抱えようとして、危うく転びかけて今に至る。

私より体力が無い男性が存在した事に少し驚いたが、彼を安心させるように笑い返す。

「気にしないでよ。誰にだって向き不向きはあるんだ。そうやって気遣ってくれるだ

けで嬉しいし、僕の不得意なものが出た時は君の力を貸してほしいな」

そう慰めると、鬼壺さんは大きく頷いた。

「う、うん！ ほくに出来る事があるなら頑張るよ！ って言っても、ほく、出来る事の方が少ないけど……でも、頑張る！」

そして嬉しそうに続けた。

「……ほく、助けてもらえたのも、体を気遣ってもらえたのも、初めてだったから……。凄く、嬉しかったんだ……」

彼がどういう環境で育ってきたのかは知らないけど、天狗寺といえは陰陽師の界隈でも歴史ある一族と聞いたことがある。

（確か、将来有望だったご長男が狂死されたとか……？）

そんな噂を思い出していると、鬼壺さんがポツリと呟いた。

「……だから、君が、まるで御伽噺おとぎばなしに出てくる王子様みたいで……、凄くカッコ良く見えて……」

「王子様？」

その言葉について彼を見上げる。

しかし鬼壺さんは口を押さえて青ざめた。

「あ、ご、ごめん！」

「いや……」

「違うんだ、その、本当に君のこと、格好良く見えて……って、こ、こんなこと、男同士で言ったら気持ち悪いよね！ 普通、こういう事、言わないよね！ ごめん！ ぼ、ぼく、いつもこうで……。一言多いって、父上や兄上にも言われてて……」

鬼壺さんは焦っていたけれど……。

（う、嬉しい！ 王子様……！ 男性から見て王子様と思われるくらいならば、私の男装がバレる可能性は低いのでは……！）

しかし、そこで御霊府君が宙に浮きながら口を挟んでくる。

『灯子よ、普通のおのこは、同性にそのように言われたら気色悪がつて殴るものじゃ』
殴れ！ と拳を素振りしてくる御霊府君。

そんな彼をなだめていると、食堂と寮を繋ぐ廊下で、生徒がたむろしているのが目にはいった。

どうやら彼等は官位を授けられた陰陽師一族の御子息達らしい。

そして、出自不明の私に良い印象を抱いていないのは、彼らの目つきからすぐにはわかった。

鬼壺さんは怯えて私の背後に隠れた。

寮に入るには、彼らの横を通るしかない。

近づくと、ひそひそと声が聞こえてきた。

「陰陽師は元来、血統が重要だというのに……」

「まさか同じ学び舎に雑種の庶民が配属されるとはな」

「知性も品性も無い庶民に陰陽師の職が務まるわけがない」

私は一応、とある筋からの推薦だけれど、事情があつて表向きは一般人ということになっている。

（陰陽師は血統が重視されがちだ。だから、この反応も無理はない……）
無益な争いを起こして目立つのは、もう避けた方がいいと思っていた。

すると、後ろで物音がした。

振り返ると、鬼壺さんが派手に転んでいた。

「だ、大丈夫？ 鬼壺君！」

呼びかけると、鬼壺さんは目尻に涙を滲ませたまま、無理に笑顔を作つて答えた。

「だ、大丈夫……ぼくは、大丈夫だから……、キミは早く、寮に……」

起き上がれずにいる彼。鬼壺さんのすぐ横にいる生徒達が、ニヤニヤ笑っているのが見えた。

生徒たちはそのまま、地面に横たわる鬼壺さんを嘲笑うと、彼の長い髪を掴んで持ち上げた。

「鬼壺、お前、無能の癖にデキる兄貴の代わりに陰陽師になれって言われたんだって？ そんなの無理に決まってるだろ！」

「お前みたいな女顔の弱虫が陰陽師になれるわけねえし、天狗寺家の家柄を利用して裏口入学されるとさあ、俺らの品格まで下がって見えるだろ！」

「田舎臭え庶民に入学されるのもムカつくけど、家柄しか取り柄がねえ奴がのさばってるのも気に入らねえ！」

「ヲ組とか、もう終わってるだろ。それにしがみつく理由ある？ 辞めろよ、辞めちまえよな！」

鬼壺さんは彼等と面識があるらしい。

ひたすら耐える鬼壺さんの姿に、御霊府君の気配が鋭くなったのが伝わってくる。

それは私もだ。

鬼壺さんは周囲を巻き込まないように、じっと耐えているの。

そんな彼を当然のように踏みにして笑っている彼らが、どうしても許せなかった。

「前から思ってたけど、こいつ女顔だし、マジで男か？ 本当は女なんじゃね？」

誰かの言葉をきっかけに、周囲に下卑た笑いが広がり出す。

鬼壺さんは確かに中性的な顔立ちだけど、背は道蓮様よりも高いし、骨格だつてどう見ても男性だ。

だから、ただ単に鬼壺さんを馬鹿にするための発言なのだろう。

「そうだそうだ！ 全裸になって証明してみろよ！」

「そもそも雑魚にその制服は分不相応なんだよ！ お前みたいなのが俺らと同じ制服着てるとか、不愉快なんだわ！」

「ほら、さっさと脱げよ！」

鬼壺さんは大勢に押さえつけられる。

「や、止めて！ 止めてよ！ ぼくは男だよ！」

嫌がる鬼壺さんをおも鬨る集団に、私はついに耐えきれなくなった。

背負っていたマキリさんを片隅に横たえ、彼等に声を上げる。

「やめなよ！ そんな恥ずかしい事は！」

抑えきれずに出た声に、集団の視線が一斉に私に向けられる。

自分たちより弱いと見下した相手には、どれだけ侮辱しても反撃されない——そう

信じて疑っていないのだろう。

彼らは嘲るように問い返してくる。

「は？ 今、何だったんだよチビ！」

「お前もドベのヲ組だろうが？」

「最下位組の上に、一般人の雑魚のくせに、俺らに命令とか……恥ずかしくねえの？」

酷い振る舞いや言い様に耐え切れず、私は言い返す。

「……価値観は人それぞれだと思うけど、その思想を振りかざして、他人を傷つけるのは間違っているよ。それって、最下位の僕より学園の名に泥を塗る行為だと思う。それに陰陽師として誇りを持ち、家名を守るに相応しい品性を学ぶことも、この学校での大切な役目なんじゃないのかな」

無体を止めてもらおうと真剣に伝えたつもりだった。

「てめえ！ ドベの庶民の癖に俺らに偉そうに説教してんじゃねえぞ！」

「何様のつもりだ！ テメエも腕がすぞ！」

怒り狂う集団に対して、御霊府君が鼻で嗤う。

『フッ！ 流石は僕の灯子じゃ！ 的確に下郎どもをブチキレさせおったわ！ よし！ 処すぞ灯子！ こやつらに、この世の地獄を見せてやるしかあるまいて！』

御霊府君が拳を握りしめて熱心に励ます中、嘲りながら寄ってくる彼等が私の肩を掴もうとした。

（武術は、御霊府君に憑依された時に体で学んだし、護身術も頭に叩き込んでいる。落ち着いて……落ち着いて相手を見て……！）

呼吸を整えながら、向かってくる相手の腕を逆に掴んで引き倒した。

「ぎゃあ！」

相手の力を利用して地面に捻じ伏せた。

思った以上に技が綺麗に決まり、私自身が驚いてしまう。

そして対人戦闘で殺さず、大きな負傷もさせずに制圧できた事に少しだけ自信がついた。

（力では女性は殿方に敵わないと聞いていたけれど、工夫すれば……勝てる……！）
ほんの僅かな自信を得た私だった。

けれど、それは相手が慢心していたからで、私の護身術を見た残りの少年らは身構え始めた。

「こ、こいつ！」

「やりやがるぞ！」

「おい！ 囲め！ 一斉に飛びかかれ！」

今度は四方から少年達が襲い掛かってきたのだ。

（こ、こういう場合は……！）

教えを思い出そうとしている私の脳内に御霊府君の声が響いた。

『灯子！ 集団戦はまだ灯子には早い！ 僕と替われ！』

私が返答する前に御霊府君に体を強制的に奪われた。

その後は、見るも無残な光景が広がってゆく。

御霊府君が笑いながら鞘つきの日月剣を鈍器代わりにして全員を殴打する。さらに眷属の式神を飛ばして嘔みつかせ、回し蹴りや肘打ちに関節技まで繰り出して、一方的に鬪り抜いた。

少年達は御霊府君が振りかぶった得物の一撃でゴムマリののように転がされた。

「な、なんだこのチビ！ すげえ強え……」

悲鳴が飛び交う中、御霊府君は倒れた少年達を踏みつけた。

返り血に染まった鞘を肩にかけ、上機嫌な様子で笑う。

『陰陽師見習いと言うから、どの程度のものかと思えば、赤子の手を捻るより容易いではないか！ あまりにも歯ごたえが無うて欠伸がでるわ』

御霊府君は逃げ出した生徒を見送ると、あっさりと言った。

『で、儂の出番は終わったようじゃな。後の事は任せる』

「ええ!？」

暴れるだけ暴れた御霊府君は体から出て、言った。

『はよう寮に行くぞ。同級どもを全て斃し、最後に立っていた者が陰陽頭になれるのじゃろう?』

陰陽學寮はそういう場ではない。

御霊府君は鬼壺さんを助けたい意思など微塵も無かつたらしい。

御霊府君の誤解は後で解くこととして、私はとりあえず鬼壺さんに手を差し伸べた。「怖い思いをさせて申し訳ない。怪我は大丈夫かい?」

怖いどころの話ではないけれど、私は出来る限り人畜無害な振る舞いを心がけて話しかけた。

「……ど、どうして、君はぼくを助けてくれるの? 朝の鬼の時だって……」

「これから共に過ごす大切な相手を守るのに、理由があるのかい?」

「えっ……?」

鬼壺さんが固まった。

不思議に思っていると、鬼壺さんに唐突に私の手がぎゅっと握り締められる。

見下ろした鬼壺さんは、乙女のように潤んだ瞳で此方を見つめていた。

「あ、あのっ! お兄様って呼んでもいいでしょうか?」

四、

「……それはどういう状況だ」

道蓮様が寮の受付で私を見るなり、嫌そうに片目を細めてきた。

私の傍らには陶酔した眼差しの鬼壺さんが居る。片時も離れないような勢いで、べったりとくっついていた。

道蓮様の問いかけに私も説明が出来なくて首を振る。

「僕にも何が何だか……」

鬼壺さんは先程の騒動でできた私の制服のほつれを直そうとしたり、髪が乱れているのを見て琥珀の櫛を差し出したりする。

それから、鬼壺さんは道蓮様に熱弁し始めた。

「キミは知らないだろうけど、お兄様は凄いだよ！」

「……お兄様……?」

道蓮様が更に嫌そうな顔で問い返すと、鬼壺さんは頷く。

「そう！ 怖い集団にも凜々しく立ち向かってくれて、倒れたほくに優雅な笑みで手

を差し伸べてくれて……凄く格好良かった……」

どれも人として普通の事なのに。

「……気色悪い」

まるで命を救われたかのように心酔する鬼壺さんに、道蓮様が軽蔑の表情と共に言い放つ。

しかし鬼壺さんは、先ほどまでの気弱な姿が嘘のように、平然と言い返した。

「道蓮君って、可哀想。お兄様の妻さがわからないんだ」

「……」

私だけでなく、道蓮様もその変貌ぶりに面を食らったらしい。

微妙な空気を遮るように、マキリさんの声が響いた。

「あれ？ 誰もいねーぞ？ 部屋割りってのはどうすんだ？」

誰かいないかと、受付に入ろうとするマキリさんを慌てて引き止める。

そうしているうちに、寮の奥へ続く廊下から、白衣を身に着けた女性が颯爽と歩いてきた。

彼女はとても珍しい装いをしていた。

長い髪を後頭部で束ね、切れ長の瞳、赤い唇。

肩に掛けた白衣が風を切り、下には女性には珍しい洋装——ワイシャツにズボン。

豊かな胸元がワイシャツを押し上げ、堂々とした足取りで革靴の音を響かせる。女性は独特の装いを見事に着こなしていた。

「いらつしやい！ 貴方達がヲ組のコね！ ごめんなさいね、お部屋の準備に手間取っちゃって……って、あらあらあ〜？」

につこりと微笑んだ女性は、興味津々な視線を巡らせると、艶やかな唇で吹き出した。

「あら、やだあ！ 道蓮ちゃんとマキちゃん、ヲ組だったのお〜？ 幾ら待っても来ないと思つてたらあ……ぶぷっ！」

笑いを堪える女性に道蓮様が不機嫌に告げた。

「さつさと部屋を教えろ」

女性は道蓮様とマキさんと知り合いで、寮母の兩多子様というらしい。

彼女は悪戯っぽい表情を浮かべると、道蓮様とマキさんを大きな胸の中に抱き締めた。

「止めろ」

「タコ〜やめろ〜！ 窒息すんだろ！」

その様子を見て、御霊府君は侮蔑の笑みを浮かべた。

『……あの小僧、やはり都会で女を引っかけ、よろしくやつていたようじゃ』

「……」

『灯子……』

何も言えずにいる私に御霊府君が言葉を切る。

そんな中、手を叩く音がした。

「じゃれあいはこのくらいにして、寮の説明をするわね！ 最初に。この寮は部屋数が少ないから、個室は諦めてね。お部屋はみんな平等に二人部屋。でも各部屋にお風呂とお手水ちゆうすずつきよ。素敵でしょ？」

初耳の情報に衝撃が走った。当たり前のように個室だと思っていたが、学園の規模を考えれば当然だ。

「というワケで、皆、張り切って共同生活で連帯感を高めていきましょう！ ちなみに逆らったら裏庭の馬小屋行きだから、ちゃちゃっと入室してね」

『おい！ 女！ かような話、儂は聞いておらぬぞ！』

私に憑いた御霊府君の言葉を無視して、兩多子様は傍らの座卓の上にあつた紙を見せた。

「安心なさい。部屋割りは恨みっこ無しのクジ引きよ」

まさかのアミダ。

そして間を置かず、クジの結果が出た。

鬼壺さんとマキリさんが同室。その向かいが、私と道蓮様の部屋。
(ど、道蓮様と同室?)

ただ、兩多子様は教官から私の事を聞いていたらしく、部屋に向かう前に小声で呼び止められた。

「燈次郎くん……っっていうか、灯子ちゃんよね！ アタシ、灯子ちゃんを応援してるからね！」

兩多子様を見つめ返すと、耳元で続けられる。

「困った事があつたら同性のおねえさんに何でも相談してね。女の子には色々あるでしょ？」

そうしていると、道蓮様が刀を携えて外へと向かった。

兩多子様が何処どこに行くのかと問うと、道蓮様は背を向けて長い髪を翻す。

「……付き合っついてられるか。俺は鬼を殺す為に修行するのみだ」

こうして私一人だけが部屋へ向かうことになったわけだけれど……。

御霊府君は部屋のベッドの上で浮きながら、不満気だった。

『かように生意気な小僧と同室とは、灯子もツイておらぬのう！ 破棄したとはいえ、

許嫁の間柄であつたと言うに！』

そんな府君をなだめながら、私は遠い目をする。

「……それはもう、昔の話ですから」

『それはそうじゃが……』

それよりも、今の私には時間が無い。

背中が呪詛で痛んだ。

実家に封印されていた黒い鬼。

鬼は私の一族を殺害し、弟に目覚めぬ呪いをかけた。

私の体も魂も、その鬼によってかけられた呪詛が蝕んでいる。

御霊府君が私の背中を撫でながら告げた。

『……呪詛が痛むか？ 灯子。くっ……儂おんまがしに陰陽頭の知識さえあれば……』

陰陽頭。

陰陽師の頂点にして、あらゆる禁術の閲覧を許された存在。

陰陽頭にさえなれば、私と弟の呪詛を解く方法がわかるかもしれない。

そう分家の一族を説得してくれたのは、教官と、狂火きやうかという方だった。

でなければ、一生、分家のお荷物扱いだったろう。

御霊府君が首を振った。

『……おなご一人で生きてはいけぬとは……。今も昔も世知辛い世の中じゃ……』

それでも私はまだ、幸運なのだと思うようにしている。